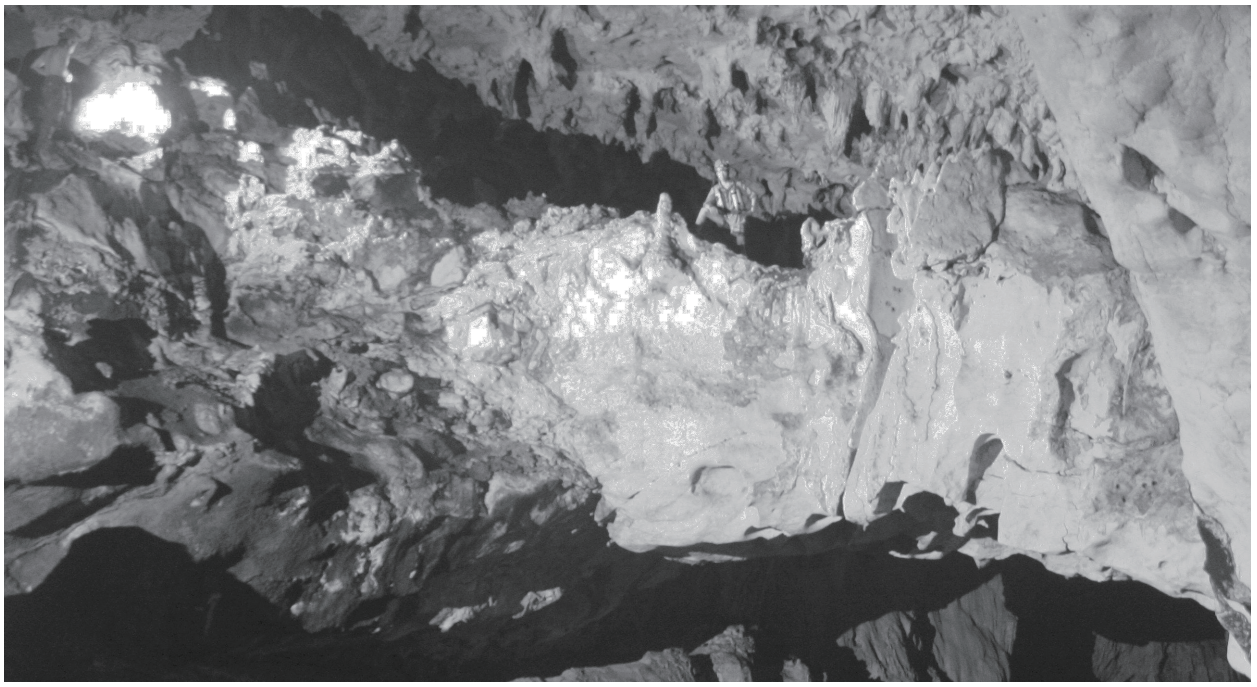
インドネシア遠征記
～東カリマンタン州マラン川上流に遡（さかのぼ）りて～

佐野洋輔（SANO, Yosuke 早稲田大学探検部所属 東京都在住）

8月15日、ついに我々はテボ洞窟（Goa Tebo）にたどり着いた。許可取得に手間取り、計画より1週間遅れでの到着であった。飛行機、車、ボート、徒歩と連日の移動で疲れはたまっていたが、時間もないので早速調査を始めることにする。水流の流れ出る洞口は高さ2m、幅1m程度で小ぶりだが、洞内には巨大な空間が広がっているという。



テボ洞窟のナチュラルブリッジ

■はじめに

2010年8月、我々、早稲田大学探検部はインドネシアの東カリマンタン州において洞窟の測量調査を実施した。カリマンタンでの洞窟調査は、我々にとって困難続きであったが、日本でのケイビングでは考えられない貴重な体験をすることができた。以下に調査の報告を記す。

■経緯

本遠征のきっかけは、インドネシア人ケイバー、チャヒョー・ラーマディ (Cahyo Rahmadi) 氏との出会いであった。私がケイビングをはじめて半年ほどたった2009年の暮れ、東京スペレオクラブの会合に参加したときのことである。

チャヒョー氏は生物学の博士課程で茨城大学に在学しており、洞窟生物の研究をしている方だ。彼からインドネシアの洞窟の話を聞き、私はえんじ色の手形の洞窟壁画で有名なサンクリラン・カルストに興味を覚えた。このカルスト地帯には、幾度かフランスやインドネシアのケイバーが調査に来ているが、8000平方kmという広大さゆえ、まだまだ多くの未踏洞窟が残っているという。彼にサンクリラン・カルストの洞窟壁画を研究しているピンディ・セティアワン (Pindi Setiawan) 氏を紹介してもらうと、2010年3月、私は早速ジャワ島のバンドゥン工科大学で教鞭を執るピンディ氏を尋ねた。ピンディ氏から、現地の石灰岩分布や洞窟壁画、交通事情について話を伺い、その足でサンクリラン・カルストに向かった。インドネシア語もわからず、十分な装備も持っていなかったが、現地の大学生とガイドの力を借り、なんとかジャングルに分け入って夏の遠征候補地を決めた。帰国してからはただちに隊員の募集を開始し、資金集めに奔走した。隊員は集まったが、素人同然であった我々は、週末になると毎週のように訓練で洞窟に通った。

■出発

背面に100Lザック、正面に50Lザックという重々しい格好で、隊員6名は成田空港に集合した。準備不足は否めなかったが、ついに出発のときが来てしまった。全員10kg近くも手荷物重量制限を超過していたが、経由地のフィリピン・マニラ空港で乾電池を40本没収されただけで、ほかは問題なくジャカルタの空港に降り立つことができた。

インドネシア大学のアウトドアクラブ、マパラ・ウイ